

## 三論学派における約教二諦説の創唱者をめぐる問題

村上明也

### 一 はじめに

三論学派の代表的な学説に「約教二諦」がある。しかし、その創唱者をめぐっては、二説の見解が学界に提出されている。一つは、約教二諦説が建康郊外の撰山に住した僧朗（？—四九五—五二—？）に端を発して吉蔵（五四九—六二三）へと受け継がれたとするものであり、もう一つは、僧朗以前に建康や広州の南地で活躍し、『成実論義疏』（現存せず）の作者および『涅槃經集解』の注釈者の一人として著名な大亮（？—四六五—四七二）によって唱え出されたとするものである。<sup>(2)</sup>

本稿では、吉蔵の全著作中、大亮に関説する箇所を網羅的に抽出・調査することで、三論学派における約教二諦説の創唱者をめぐる問題を再検討したい。これによって、吉蔵が南北朝時代の仏教教理を如何に批判し超克したのか、その一端を知ることができる。

### 二 大亮が僧亮や道亮と呼ばれることについて

先行研究によれば、大亮は、僧亮とも道亮とも呼称される人物である。<sup>(3)</sup>

建元寺の法朗が編纂したと考えられている『涅槃經集解』<sup>(4)</sup>の注釈者の中に僧亮がいる。この僧亮を天台の灌頂（五六—一六三）や三論の吉蔵が「大亮」と呼んでいることは、以下の文より明らかであるう。

吉蔵『涅槃經遊意』<sup>(5)</sup>

第一大亮師、明涅槃無翻。彼云、涅槃是如来神通之極号、常樂八味之都名。涅槃是異俗之名。名有楚夏。前後互出乃有三名。涅槃正是中天竺之音、名含衆義。此方無一名以訳之。存其胡本焉。

法朗編『涅槃經集解』卷第一<sup>(6)</sup>

僧亮曰、此是如来神通之極号。常樂八味之都名。涅槃是異俗之音。音有楚夏。前後互出乃有三名。謂泥洹、涅槃、泥曰。言涅槃者、中正天竺之音也。名含衆義。此方無一名訳之。存其胡本焉。

灌頂『涅槃經玄義』<sup>(7)</sup>

広州大亮云、一名含衆名。訳家所以不翻、正在此也。名下之義、可作異釈。如言大者、莫先為義。一切諸法莫先於此、又大常也。又大是神通之極号、常衆之都名。故不可翻也。

法朗編『涅槃經集解』卷第一<sup>(8)</sup>

僧亮敘曰、如來神道之極号。常衆八味之都名。而此異俗之音。有楚夏之別。所謂涅槃泥洹泥日也。涅槃乃中正天竺音也。名含衆義。

また、大亮が道亮と呼ばれることについては、以下の『高僧伝』の記事が参考になる。

釈道亮、不<sub>レ</sub>知<sub>二</sub>何許ノ人<sub>一</sub>ナルヲカ。住<sub>二</sub>京師ノ北多宝寺<sub>一</sub>。…中略…南<sub>ハ</sub>適<sub>ク</sub>広州<sub>ニ</sub>。…中略…著<sub>二</sub>成実論義疏八卷<sub>一</sub>。(大正五〇・三七二中)

『二諦義』『四論玄義』には、順に「広州の大亮」「北多宝寺の広州大亮」(後出)とあるので、この大亮と『続高僧伝』所載の道亮は、年代的にみても、同一人物であると考えられる。以上より、筆者も大亮・僧亮・道亮が同じ人師であると理解したい。(以下、「大亮」で統一)

### 三 大亮の約教二諦説に対する吉蔵の評価

約教二諦説は、吉蔵の独創によるものではない。これは先行研究においても衆目の一致するところである。しかし、問題は、三論学派における約教二諦説の創唱者が誰かという点にある。

次<sub>ニ</sub>明<sub>ス</sub>二諦<sub>ハ</sub>是<sub>レ</sub>教<sub>ノ</sub>義<sub>ナルヲ</sub>。撰<sub>レ</sub>嶺興皇<sub>ヨリ</sub>已<sub>レ</sub>来、並<sub>テ</sub>明<sub>ス</sub>二諦<sub>ハ</sub>是<sub>レ</sub>

三論学派における約教二諦説の創唱者をめぐる問題(村上)

教<sub>ナリト</sub>。所以<sub>ニ</sub>山中師ノ手本<sub>ニ</sub>二諦疏<sub>ニ</sub>云ク、二諦トハ者乃チ是<sub>レ</sub>表<sub>ニ</sub>中道<sub>一</sub>之妙教、窮<sub>ニ</sub>文<sub>言</sub>之極説ナリ。(大正四五・八六上ノ中)

吉蔵は、三論学派における約教二諦説が僧朗(撰嶺)→僧詮(?—五五七/五五八、山中)→法朗(五〇七—五八一、興皇)より相承されてきたことを強調する。

ところが、先行研究に従うと、僧朗以前にすでに南地の建康において約教二諦説を唱えていた人物がおり、それが大亮であるという。

広洲ノ大高<sub>ママ</sub>ノ釈<sub>スルニ</sub>二諦ノ義<sub>ヲ</sub>、亦<sub>タ</sub>弁<sub>スルナリ</sub>二諦<sub>ハ</sub>是<sub>レ</sub>教門<sub>ナルコトヲ</sub>也。彼<sub>ハ</sub>挙<sub>ケテ</sub>指<sub>ヲ</sub>為<sub>ス</sub>喩<sub>ト</sub>。(大正四五・九〇上)

第四<sub>ニ</sub>宗<sub>ママ</sub>国北多宝寺ノ広州大亮法師ノ云ク、二諦トハ者蓋シ是<sub>レ</sub>言教ノ之通詮、相待ノ之仮称<sub>ニ</sub>シテ、非<sub>ニ</sub>窮宗ノ之実因<sub>ニ</sub>ハ也。(新正統四六・五七三下)

『二諦義』『四論玄義』に従えば、大亮は二諦を約理ではなく、言教であると明言する人物である。また、『二諦義』によれば、大亮の約教二諦は、「指月の喩」によって説明されるところに大きな特徴がある。

さらに、大亮の約教二諦説は、吉蔵『大乘玄論』の本文にも影響を与えている。

吉蔵『大乘玄論』卷第一<sup>(9)</sup>

二諦者蓋是言教之通詮、相待之  
假称、虚寂之妙実、窮中之極  
云、二諦者蓋是言教之通詮、相

慧均『四論玄義』卷第五<sup>(10)</sup>

第四宗国北多宝寺広州大亮法師

三論学派における約教二諦説の創唱者をめぐる問題（村上）

三〇

号。 一待之仮称、非窮宗之実因也。

これによつて先行研究では、僧朗よりも古い、広州の大亮こそが約教二諦説の提唱者であり、僧朗、僧詮、法朗、吉蔵と次第する、伝統的な三論相承説もまた、再考する必要があるのではないかと述べる。

しかし、一方では、吉蔵自身も多用する「指月の喩」というのは、大亮からの影響ではなく、吉蔵が熟知していた『大智度論』、『入楞伽経』、曇影「中論序」の文を依用したものであり、上掲の対照表による本文一致についても、大亮の二諦説と関連することは間違いないが、これまで考えられてきた三論相承説が否定されるものではないとする意見もある。

この議論の分かれ目は、次に挙げる『大乘玄論』巻第一の文を如何に解釈するのか、という点にあると思われる。

三説ハ雖モ復タ不シテ同シカラ、或ハ言ニ含ニ智解ヲ、或ハ辞ニ兼ニ聖教ヲ、同シク以テ境界ヲ為ス諦ト。若シ依レハ広州ノ大亮法師ニ、定テ以テ言教ヲ為ス諦ト。今ハ不レ同シカラ此レ等ノ諸師ト。問フ、撰嶺ト興皇ハ何ソ以テ言教ヲ為スヤ諦ト耶。…後略（大正四五・一五上）

これによると、智蔵（四五八―五二二）、僧旻（四六七―五二七）、法雲（四六七―五二九）の二諦説は、いずれも対象としての真理を諦とし、大亮は二諦を言教でもって理解したとする。

ここで重要なのは、吉蔵が「今は此等の諸師と同じからず」

といっていることである。これには二通りの解釈ができる。

- ① 吉蔵は、約理二諦の智蔵、僧旻、法雲や約教二諦の大亮を含めて、「此等の諸師と同じからず」といった。
- ② 約理二諦を説く梁の三大法師と約教二諦を主張した大亮を厳密に区別して、大亮だけは「此等の諸師と同じからず」といった。

どちらが正しいのかを断定することはできないが、いずれにしても、『大乘玄論』の文に二通りの解釈が可能である以上、これをもって大亮への評価を議論することは危険である。

#### 四 吉蔵の大亮批判

前述の通り、後世の副次的な資料によれば、中国仏教史上、約教二諦説を明言したのは大亮である。これに異論が出されることはないように思う。

しかし、ここで注意したいのは、歴史的に「約教二諦」を唱えた人物を、そのまま三論学派における約教二諦説の創唱者と認めてもよいのか、ということである。というのも、どうして、『大乘玄論』において、吉蔵はその後の二諦に関する議論で、大亮の名を一度も出さず、僧朗、僧詮、法朗に基づいて論を展開するのであるか。この疑問に明確な回答が与えられなければ、三論学派における約教二諦説の創唱者の問題が収束に向かうことはない。

これまで全く指摘されてこなかったが、吉蔵は、大亮の『涅槃經』の注釈に対して批判的であり、これこそが『大乘玄論』の二諦説で一度しかその名を挙げなかった要因の一つと考えられる。

次ニ明ニ涅槃ノ義ヲ。…中略…無翻ノ四師トハ者、第一ニ大亮師、明ニ涅槃ハ無翻ナリト。…中略…今作ニ五難ヲ。難シテ云ク、一ニハ作スニ大ニニ非ナリト。不等ノ難アリ、…後略(大正三八・二三三上〜中)

これを見ても明らかのように、吉蔵は、『大般涅槃經』の經名である「涅槃」が翻訳できるのか(有翻)、翻訳できないのか(無翻)をめぐる、大亮などの説を批判している。

また、『涅槃經』の「本有今無偈」についても、吉蔵は大亮を批判する。

広州ノ大亮ノ釈シテ云ク、言フハ本有ト者、本ト有リ煩惱、今無トハ者、今無シ煩惱。本無トハ者、本ト無シ般若。今有トハ者、今有ニ般若。此是レハ上半ノ意ナリ。下半ノ明ニ三世ノ有法ニ無レキヲ有ルコト。是レノ処リ者、今日ノ如来ハ不レ為ニ三世ノ所撰ト。不レ如ニ上半ニ也。何カ故ニ爾ルヤ。今日ノ如来ハ常住ナルカ故ニ非ニ三世ノ撰ニ。…中略…今東ニ此ノ四偈ヲ、不レ出ニ二意ヲ。一ニハ者約ス仏ノ二智ニ。…中略…所以ニ為レリナリ常ト。既ニ非ニ三世ニ非ニ無ニ三世ニ、豈ニ得レリヤ作ルコトヲ。三世ト。難シテ言ク、仏ハ是レ無常ナルヤ耶。二ニハ意、約ニ迷悟ノ得失ニ。…中略…此レ只タ是レ不レ有レナリ不レ無レナリ今ニ非ニサレカリ本ニ。…中略…故ニ非ニ三世ノ撰ニ。所以ニ常トナルナリ也。

吉蔵(上半下半ともに常)は、大亮(智蔵の見解を含む)の『涅槃

三論学派における約教二諦説の創唱者をめぐる問題(村上)

經』「本有今無偈」解釈<sup>(14)</sup>(上半を無常、下半を常)に批判的であることが分かる。

そればかりか、前掲の文の波線部「非三世非無三世の常」と「不有非今非本の常」は、その後の『中觀論疏』や『大乘玄論』の中で次のような学説として纏め上げられる。

三ニハ者、八不ノ偈ハ即チ涅槃ノ本有今無ノ偈ナリ。…中略…故ニ非ニ三世ニ非ニ無ニ三世ニ。故ニ名ケテ為ニ中道ト。若シ得レハ此ノ悟リヲ、名ケテ為ニ正觀ト。宣フ之ヲ於言ニ。故ニ称シテ為ニ論ト。即チ第三重ノ八不ナリ。(大正四二・三〇中)

今一家ノ相伝モテ明ニサレハ仏性義ヲ、非レ有ニ非レ無ニ非レ本ニ非レ始ニ、亦タ非ニ当現ニ。…中略…故ニ云ク、至ラハ竟ニ終ニ是レ無本無始ノ義ナリ也。(大正四五・三九中〜四〇上)

吉蔵『涅槃經疏』の「非三世非無三世の常」が『中觀論疏』では「非三世非無三世」の中道正觀(第三重の八不)、「不有非今非本の常」が『大乘玄論』では「非有非無非本非始」の仏性として扱われている。

要するに、吉蔵は、大亮などの前代仏教者への批判を契機として、三論教学の「本有今無偈」解釈、八不義、仏性義の議論を組み立てているのである。

## 五 まとめ

中国仏教史上、二諦を約教として明言した最古の人物は、大亮である。しかし、『三諦義』においても、『大乘玄論』に

においても、吉蔵は大亮を伝統的な三論相承説の中に組み込んで議論することはない。よって、三論学派においては、約教二諦説の創唱者を大亮であるとは認めていない。

その理由の一つとしては、吉蔵が大亮の『涅槃經』解釈に批判的であったことが考えられる。なぜならば、『涅槃經遊意』や『涅槃經疏』の中で、吉蔵は「涅槃の有翻・無翻」や「本有今無偈」の解釈をめぐって大亮を批判的に扱っているからである。さらに、『中觀論疏』や『大乘玄論』では、大亮批判をおこなった『涅槃經疏』の教説に基づきながら、三論教学としての「八不義」「仏性義」を展開していることも明らかとなった。

したがって、本稿は、三論学派における約教二諦説の創唱者をめぐる問題を再検討することにより、南朝時代の教理が隋代仏教において批判される具体的な実例を大亮と吉蔵の『涅槃經』解釈に求め、吉蔵の八不義や仏性義の一部の議論が、大亮を反駁する中から構築されたものであることを指摘した。

1 平井俊榮『中国般若思想史研究——吉蔵と三論学派——』(春秋社、一九七六年)の四六九～四七〇頁。

2 佐藤哲英「三論学派における約教二諦説の系譜——三論宗の相承論に関する疑問——」(『龍谷大学論集』三八〇、一九六六年、一～二四頁)。

3 布施浩岳『涅槃宗の研究』後篇(国書刊行会、一九七三年)の二三二～二四一頁。

4 菅野博史「『大般涅槃經集解』の基礎的研究」(『南北朝・隋代の中国仏教思想研究』所収、大蔵出版、二〇一二年、三五～四二八頁)。

5 大正三八・二三三上～中。

6 大正三七・三七七中。

7 大正三八・一下。

8 大正三七・三七七中。

9 大正四五・一五上。

10 新出統四六・五七三下。

11 吉蔵全著作中、『大智度論』などの出典を明示して「指月の喩」が語られることは一度もない。よって、この見解に関しては、再検討する必要がある。

12 『涅槃經集解』(大正三七・三七七中)。「大乘玄論」卷第三「涅槃義」(大正四五・四六上～中)も併せて参照されたい。

13 平井俊榮「吉蔵著『大般涅槃經疏』逸文の研究(下)」(『南都仏教』第二九号、一九七二年)の九〇～九一頁。

14 吉蔵『涅槃經疏』に紹介される大亮釈と『涅槃經集解』の大亮釈(大正三七・四七二上)を比較すると、多くの文字の異同がみられる。しかし、上半の「本有今無 本無今有」は無常を、下半の「三世有法 無有是処」は常を表すという大意は一致している。

〈キーワード〉 三論、吉蔵、大亮、約教二諦、本有今無偈

(龍谷大学非常勤講師・博士(文学))